

福岡市における発掘調査報告書のデジタル化と公開について

今井隆博（福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課）

Digitization and Publication of Archaeological Excavation Reports in Fukuoka City

Imai Takahiro (Cultural asset excavation section, Fukuoka City Government)

・発掘調査報告書／Archaeological excavation reports

・デジタル化／Digitization・インターネット公開／Online publication

1. はじめに

福岡市内では年間約 40 件の発掘調査が実施され、毎年約 30 冊の発掘調査報告書（以下、報告書とする）が刊行されている¹⁾。昭和 42 年刊行の『有田古代遺跡発掘調査概報』を第 1 集とし、令和 2 年 3 月末時点では第 1404 集まで刊行され、膨大な調査成果が蓄積されている。これらの報告書は、福岡市埋蔵文化財センターの図書室で一般公開しているほか、日本各地の図書館・博物館・大学等に送付し、一般市民や研究者の利用に供している。しかしながら、発行部数の制約から送付先には地域の偏りがあり、県によっては数機関しか送付できていないところもあった。そういったところでは、報告書閲覧希望者の居住地近辺に福岡市の報告書を所蔵する図書館等がない場合もあり、全ての人が等しく手軽に利用できるとは言えない状態にあった。これらの問題を解消し、且つ報告書をさらに有効に活用するために、福岡市埋蔵文化財センターにおいて報告書のインターネット公開を検討した結果、全国遺跡報告総覧（以下、遺跡総覧とする）に参加することとした。本稿では福岡市の報告書公開に至る経緯と、その効果や若干の課題を紹介する。

2. 報告書公開に至るまで

(1) 発掘調査報告書のデジタル化

インターネット上で公開するには、当然、報告書

のデジタルデータが必要である。福岡市では平成 15 年頃から報告書印刷業者から PDF ファイルも納品されており、近年の報告書についてはデジタルデータが揃っていた。

そして、平成 22 年度には報告書のデジタル化委託事業を行った。これは報告書の保存用データの作成と、将来的に広く公開活用を図るための閲覧用データの作成を目的としたもので、緊急雇用創出事業の交付金を適用して行った²⁾。まず、先述の PDF ファイル納品以前の報告書約 800 冊を対象とし、保存用（TIFF 形式、600dpi）と閲覧用（PDF、300dpi、OCR 処理）の二種類のデジタルデータを作成した。合わせて、既にデジタル化されていた報告書約 260 冊分の PDF ファイルについて、閲覧用解像度への変換と OCR 処理を行った。このデジタル化委託により、約 1,060 冊分のデジタルデータが作成された。

こうして、印刷業者からの納品 PDF ファイルとデジタル化委託により、この時点で福岡市が刊行していた報告書の PDF ファイルがほぼ揃ったこととなる。

(2) 全国遺跡報告総覧参加までの経緯

遺跡総覧に参加するまでの流れを簡単に記す。平成 22 年頃に全国遺跡資料リポジトリでの公開を検討するも、具体化しなかったようである。平成 23 年 2 月に先述の報告書デジタル化委託を行い、PDF ファイルは概ね揃った状態になる。平成 27 年に福岡市埋蔵文化財センターホームページや福岡市役所

ホームページでの報告書公開を検討するも、約千冊分のPDFファイルのデータ量（約40GB）が大きすぎて不可能であった。外部のレンタルサーバを使用することも考えたが、費用・手続きの面から現実的ではなかった。そうして遺跡総覧への参加を具体的に検討し、平成28年2月に参加申し込みをした。申し込みをしたものの、すぐには作業に取り掛かれず、同年7月から報告書データのアップロードを開始した。

(3) アップロード作業に必要なもの

遺跡総覧で実際に公開するために必要なものは、①報告書のPDFファイル、②報告書の抄録情報、③アップロード作業のためのPCとインターネット環境、④アップロード作業の人員、である。

平成28年に報告書のアップロードを始めるにあたって、①については先述のとおりほぼ揃っていた。②の抄録情報は、報告書抄録データベース等があったため、それを参照することができた。古い報告書は抄録が無いものも多いため、抄録情報が既にまとめられていたことは大いに助かった。③は通常業務で使用する設備で十分対応できる。一番大きな問題は④の人員で、報告書1冊で見ればアップロード作業はわずかな手間であるが、千冊を超える作業を通常業務に加えて行うことは精神的に大きな負担であった。幸い、データ入力を業務とする嘱託職員の応援を受けることができ、この問題はクリアできた。こうして、報告書をアップロードする準備が整い、随時公開していくことが可能となった。

3. 報告書公開後

(1) 報告書公開の効果

報告書を遺跡総覧にアップロードし始めると、比較的早く反応が現れた。公開を始めた平成28年7月の間に閲覧・ダウンロードともに数十回となった報告書が複数あり、遺跡総覧を常にチェックしている人がいることを感じさせられた。その後、報告書は随時追加するも閲覧数・ダウンロード件数等を集計していなかったが、平成30年2月に確認したとこ

ろ、公開した報告書約1,160冊に対し、ダウンロード件数は最も多いもので約1,600件、合計6万件以上であった。そして今回改めて最新の数字を確認すると、令和2年12月時点で公開している報告書（年報等含む）約1,400冊に対し、ダウンロード件数は最も多いもので約6,700件、合計22万件以上、詳細ページ表示回数（閲覧数）は最も多いもので約2,200回、合計23万回以上となっている。予想以上に多くの方に見ていただき、報告書を公開した甲斐があったと感じている。

ちなみに、詳細ページ表示回数が多いのは国史跡の鋤崎古墳・老司古墳や板付遺跡の報告書である。また、ダウンロード件数が多いのは古墳に加えて板付遺跡、博多遺跡群、元寇防塁等で、福岡市の特徴ある遺跡の報告書が多く利用されている印象である。

最も多くダウンロードされているのは『志賀島・玄界島』という遺跡発掘事前総合調査の報告書であるが、継続して利用されているというわけではなく、約1年間の間に集中して、毎月600件前後ダウンロードされていた。その要因等は分析していないが、報告書によって、シンポジウムや講演会、ニュース、TV番組といった要素で大きく変動があるものと思われる。

また、多く閲覧されている報告書のダウンロード数が多いとも限らず、その逆のパターンもある。主に閲覧で利用される方、まずダウンロードしてからじっくり読まれる方等、色々な使い方がされているようで興味深い。

(2) 全国遺跡報告総覧の活用

報告書公開を開始するのに合わせて、福岡市埋蔵文化財センターホームページのトップ画面から遺跡総覧へのリンクを設定し、福岡市の報告書を公開している旨のコメントを添えた。これで、福岡市の報告書を探してホームページを訪問した方への案内になり、自前のホームページで公開するのとはほぼ同様の効果を得られたと思う。

報告書の他、市内発掘調査の概要を記した埋蔵文化財年報や埋蔵文化財センター年報も公開した。現

在は【みんなでMYBUN!】という埋蔵文化財センターの資料・事業を紹介する広報動画も登録している。また、遺跡総覧はイベント情報の掲載もできるので、シンポジウムや講座、企画展示の広報にも利用可能である。

(3) 全国遺跡報告総覧のメリット

遺跡総覧で公開したことで、「報告書を見たい(コピーしたい)」「○○遺跡のことを詳しく知りたい」という電話問い合わせに対応しやすくなった。従来は図書館や埋蔵文化財センターでの閲覧を案内するしかなかったが、インターネットを利用する人であれば遺跡総覧でのPDFファイルダウンロードを案内できるようになった。これだけでも報告書公開を検討した当初の目的は達成されたと思う。

アクセス統計も嬉しい機能で、閲覧数・ダウンロード件数等の実績を全期間や月単位で把握することができる。作業担当者の個人的な感想であるが、多くの人が報告書を利用してきていることを実感でき、アップロード作業を進める励みになる。

また、遺跡総覧に登録することでバックアップの一つにもなっている。紙媒体の報告書と比較できるものではないが、PDFファイルが保存されたCD等のバックアップ(保存先の一つ)と考えれば、災害時や電子媒体の故障に備える効果はあろう。

上記のようなメリットがありながら、参加機関は維持管理をする必要がなく、しかも費用もかからないというのは大きな魅力である。

(4) 課題

些細なことではあるが、PDFファイルの容量上限が100MBなので、分量のある報告書はPDFファイルを100MB以下に分割しなければならない。この手間を省略するために、現在福岡市では、報告書と同時に納品される閲覧用PDFファイルについては、遺跡総覧のアップロード作業にそのまま使用できる仕様(フォント埋め込み、ファイルサイズは100MB以下で複数に分割)に変更している。

また、本市の場合、市役所全体のセキュリティ対策のためアップロード作業がやや煩雑になる。いく

つかの手間と時間が余計にかかるため、アップロード作業をつい後回しにしていまいたい気持ちになる。

そして、報告書刊行数が多い自治体では、毎年の更新作業を複数人で分担する等、計画的にデータ更新をしないと、更新されないデータが溜まってしまいう恐れもある。

4. おわりに

以上、福岡市が遺跡総覧に参加するまでの経緯と、報告書公開の効果等について感じたことを書き連ねた。千冊を超える報告書を刊行している本市がスムーズに公開できたのは、PDFファイルが既に揃っていたこと、アップロード作業を担当する人員を確保できたことが極めて大きい。PDFファイルを作成するところから始めていたら、途中で挫折していた可能性もある。

遺跡総覧の様々な機能のなかで、特に便利なのは検索機能だと個人的に思っている。発行機関といった分類だけでなく、登録されている全ての報告書のテキストデータをキーワードで横断的に検索できる。これは各機関の報告書が遺跡総覧に公開されているからできることであって、福岡市が当初模索した市役所ホームページでの公開なら不可能な機能である。登録される報告書が増える度に資料が蓄積され、類例の検索等に大きな効果を発揮すると思われる。

遺跡総覧で報告書を公開することは、報告書の有効な活用方法の一つになったと思う。今後も登録報告書が増え、遺跡総覧がさらに充実していくことを期待したい。

【補註および参考文献】

- 1) 本田浩二郎 2019「V平成30年度発掘調査概要・報告」『福岡市埋蔵文化財年報』Vol.33 pp.6-9
- 2) 山崎龍雄・力武卓治 2012「1.資料の収蔵・整理」『福岡市埋蔵文化財センター年報』第30号 p.2